

「補習」「学生サポート」に関する実施報告と今後の展望

上 原 作 和*

平成 22 年度開講の「自立と体験 1」は、「自立と体験 1」は明星大学の教育目標「自己実現を目指し社会貢献ができる人の育成」を受け、「明星大学に学ぶ学生としての自分を理解し、各自の理想や目的を明確にしていくこと」を実践するためのカリキュラムを以て実施された。

これらは、明星学苑の建学の精神「和の精神のもと世界で活躍する人材を育成する」、校訓「健康・真面目・努力」を基本理念として、設定された先述の「教育目標」に則り、「全学部横断型のクラス編成」「グループワーク」「体験学習」を三本柱として編成されたカリキュラムで実施された。これらの詳細は、本紀要の各論文に依られたい。

本稿では、全十五回の授業終了後、担当教員から推薦のあった「補習」参加該当者と、「自立と体験 1」の学生サポートについて、振り返り、来年度に向けての展望を提示しておきたい。

1. 「自立と体験 1」「補習」実施報告と課題

(1) 実施内容

① 目的

・「自立と体験 1」は明星大学の教育目標「自己実現を目指し社会貢献ができる人の育成」を受け、「明星大学に学ぶ学生としての自分を理解し、各自の理想や目的を明確にしていくこと」を実践する授業である。したがって、大学における自己実現を目指すには、一年次での単位履修が不可欠である。そこで、できるだけ多くの学生の一年次での単位取得を可能とするための方策として「補習」を実施することとなった。

② 内容

・補習は、質量ともに全 15 回の通常授業よりも単位修得が容易にならない内容を期して編成した。後掲「補習」ポートフォリオ（一部抜粋）参照。

③ 補習対象者

・「自立と体験 1」の単位取得には最低 11 回の出席と三回のポートフォリオ提出が義務づけられている。また、補習受講に際して、一定の出席率を条件としたことから、全 15 回中欠席時数 5、6、7 回の学生が補習受講の基準となる。しかし、単位認定に関する学則から、基本的には担当教員から委任があった者、および、特別な事情で担当教員が補習の必要を認めた学生を補習対象者とした。

3 日間 9 コマ補習 合格者 81 名 + 条件付合格者 4 名

※条件付合格者は、原稿用紙 1000 文字が課せられ、それを提出すれば合格となることとした。結果として、1 名の棄権（課題未提出）があり、84 名が最終合格となった。

補習対象者	130 名（7 月 27 日確定）
申込者	102 名（当日申込みも含む）
補習申込無し	28 名
当日欠席	15 名
補習受講者	計 85 名 — 87 名が今回の「補習」の対象となったものの、二名途中棄権。

* 人文学部常勤教授 明星教育センター

④ スケジュール

- ・ 8月10(火)、11(水)、12日(木)の3日間、1日3コマ(2・3・4時限目)で実施。

⑤ 学生への告知

- ・ 補習参加が認められた学生には、①携帯サイト(キャンパス情報システム(学生手帳P3参照))で知らせる。②保護者住所の本人宛にハガキ郵送。
- ・ 学生は出席を明星教育センターに申し出ることによって補習出席が可能となる。

【気になった点】

- ・ 担当教員による遅刻の基準があいまいで、教員によって違いがあること。このことにより、機会均等の原則が必ずしも踏襲できなかった憾みがある点。
- ・ エントリー期限を守らず、当日無届けで登校してきた学生の参加を認めた点。
- ・ 補習参加者は遅刻厳禁としながら結果的に数名の遅刻者が出、面談の結果、授業への参加を認めたこと。
- ・ 講義中、伏せている学生に関して担当教員の対応がまちまちであった点。

【改善ポイント】

- ・ 補習実施要件のさらなる明確化と機会均等への努力。
- ・ 事前に取り決めた「参加資格」「遅刻厳禁」と言った授業履修要件の遵守、徹底。
- ・ 実施時期、規模、シラバスのさらなる検討。

【来年度に向けての提案】

- ・ 「補習」による単位取得者の一年次後期の単位取得状況、成績状況と言った追跡調査を実施し、実施効果を踏まえた、実施内容のさらなる効果的な運用が必要であろう。

【考察】

以上が「補習」に関する総括である。「補習」全日程終了後、アンケートを実施したところ、ほぼ「楽しかった」等の好意的な内容で、参加者には充実感を与えたようである。

私自身は校内清掃の体験授業と小論文とを担当した。

二日目二時間を要した体験授業「校内清掃」は、記録的な炎天下の中であったため、熱中症などの事故がないよう、細心の注意を払って進めたつもりである。コングを持つ者、ゴミ袋を持つ者、熱心な参加者もあれば、当然、手を抜く学生もある。ただし、このようなボランティア体験が初めての学生が大半であり、参加したこと自体が、極めて重要な教育効果をもたらすことが予想される。

三日目の小論文の講義では、文章の誤用例を中心に、ワーク的な要素で、日本語基礎力を再確認した後、原稿用紙の使い方を学び、前日の「校内清掃」に関する小論文の実作を行った。これが単位修得の最終ハードルの課題であったこともあり、参加者のほぼ全員が規定字数をクリアする文章量を書いている。また、学んだ誤用例に関しては、顕著な教育効果が見られ、構成の整った構文の文章によって綴られたものが多く見られた。ただし、「捨う」「捨てる」の混用など、漢字能力に関しては、まだまだ改善が必要である。これらは、教育学部を除く、全学部に通ずる必須の課題であり、リメディアル教室の利用を促すのみでは解決されない深刻な課題である。各学部の基礎教育課程において、これら日本語基礎力の抜本的な底上げを考える時であろうと思量される。

(2) 「自立と体験1」の学生支援の体制

【現状】

1) 電話による学生への出席促進

○欠席連絡

「自立と体験1」授業出欠確定後、第2回目の授業から出欠データを取りまとめて、2回連続欠席の学生に特任・常勤教員が電話を掛け、出席を促した。前半は、欠席学生との接触をはかることを目的とし、後半は欠席が多くなり、他の授業の出欠状況なども含めて、本人との面談が必要と判断された場合には、明星教育センターおよび各研究室に呼び出し、話を聴くこともあった。

特任・常勤教員が電話連絡をしたのべ人数…820人

注記：ただし、本人留守などの場合、複数回電話で接触を試みているため、実際のコール回数はこの数倍となり、担当教員の負荷が極めて大きくなったことを特記する。

○連絡手順

- ・明星教育センターが欠席状況をキャンパススクエアの出欠データから作成（スターマップの相談履歴情報を注記）し、キャンパススクエアに学生情報が掲載される以前の5月連休前までは保護者宅に、それ以降は主として学生の携帯電話に連絡し、その様子をスターマップの相談履歴に書き込んで情報を累積した。
- ・連絡手順は、原則として、学生本人の携帯、電話番号未登録、あるいは通じなければ、保護者の一般電話に連絡する場合もあった。
- ・これらがすべて不通の場合、明星教育センターから携帯サイト（キャンパス情報システム（学生手帳 P3 参照））を通じて呼び出しをかけた。
- ・欠席が続き、「自立と体験1」以外の授業にも出ていないと判断される学生は、所属学部事務室に連絡し、学部事務室対応に委ねた。

○電話連絡の効果

欠席した学生の様子を把握できたうえ、気になる学生等の早期発見と他部署との連携が出来た。

2) 担当教員および他部署との双方向連携

○電話連絡や、ランチミーティング等で、教員からあがってきた気になる学生については、学科の先生方、学生サポートセンター、学科事務室と相互に連携しつつ、サポートをした。

【気になった点】

- ・明星教育センター特任・常勤教員の電話連絡、および、携帯サイト（キャンパス情報システム（学生手帳 P3 参照））からの呼び出しに応じず、本人との接触が出来なかったため、出席の改善に繋がらないことがあった。
- ・一人暮らしの学生で、生活習慣が乱れている学生と思われる場合は、学生サポートセンターとの連携がより密にならなければ解決されない問題である。
- ・13週にわたって出席を促した結果、出席率は82.7%（7月27日現在）であった。

【改善ポイント】

- ・キャンパススクエアの学生情報の登録時期が遅い。また、情報更新を早急に行う必要がある。情報共有を密にすることが望ましい。

- ・ 学部事務室対応とした学生のフィードバックが、退学予定学生と気になる学生若干名の報告にとどまっていた。さらなる情報の共有が望まれる。
- ・ 気になる学生については、スターマップの相談履歴で情報共有が出来る状況が望ましい。来年度は、担当教員がスターマップの履歴の閲覧が可能となる案もあり、この問題については改善も見込まれる。
- ・ 学生、家庭からのコールバックが担当教員の帰宅後であった場合の対応体制が整備されておらず、各部署をたらい回しにされたと考える保護者が存在した。夕方以降のコールバックに備えた対応マニュアルを整備する必要がある。例えば、電話担当職員を雇用し、担当教員の負荷を減らすことも一案であろう。

【来年度に向けての提案】

- ・ 学生の欠席防止や、離籍率の減少に一定の成果を上げたものとは思われるが、さらなる情報の収集と連絡方法、対応の研究によって、効果の拡大をはかる必要がある。
- ・ 欠席連絡の基準は、前半と後半に対応を変えて、前半は出席の促し、後半は授業や学生生活への適応などを中心に対応することが望ましい。

【考察】

欠席学生への電話連絡は、「手塩に掛ける教育」「人格接触による体験教育」等、創設者・児玉九十の教育理念を実践するものであったと言えよう。昨年度まで、各学部学科にゆだねられていた「自立と体験1」の出席率と、本年度の出席率を比較すれば、それだけでこの電話掛けの教育効果を実証することが出来る。

また、保護者との対話も可能となって、高校時代から不登校気味であったり、心に問題を抱えている学生の早期発見と学生サポートセンター、各学部との連携が密になったことは特筆されよう。しかしながら、多くの長期欠席者には、対応する術がなく、また、欠席理由も十人十色、安易な進路選択による失敗感による厭世意識や、多額の納付金や生活費等の保護者の負担を考えず、再受験、進路変更を口にする学生の存在も忘れがたい。

これらの多くは、学生サポートセンターに委任することとなったが、こうした学生の多くはその後復学の叶った者は少数であり、高校の進路指導段階でのミスが原因である場合が多く、推薦入試段階でのセレクションでこのあたりをしっかりと見極める必要がある。このためにも、ここ数年の定員割れによる受験軟化傾向に歯止めを掛け、目的意識の高い学生を高校側にも選抜して送り込んでもらえるような全学的な体制作りが必須である。

また、斯界屈指の教育学科、心理学科を擁する「教育の明星」の名のもと、心に問題を抱える学生へのサポートは、より、抜本的、包括的な教員の資質の向上もまた、必須の課題であると言えよう。

参考 補習ポートフォリオ（一部抜粋）

「自立と体験1」補習の単位取得条件とルール

- ・ この授業は通常授業の補習となります。3日間3コマ（合計9コマ）を全て修了することで「自立と体験1」の単位が特別に認められます。
- ・ 遅刻、早退、欠席はいかなる理由でも認められません。
- ・ 授業の内容に関して、参加し、学びを深めることが単位取得の条件です。授業に休まず出席し、通常時間と同じく多くの異なる考え方に触れることで、自分なりの考えをまとめることができるよう歩みを進めてください。
- ・ このポートフォリオを3日間毎日必ず持参するようにしてください。

授業内容

8月10日(1日目)

テーマ：自分と他者について ～話す・聴く・人との関わり方～

- 1) オリエンテーション
- 2) コミュニケーション
- 3) コミュニケーションワーク

8月11日(2日目)

テーマ：大学と社会について ～新しい価値観を知る～

- 4) 自分の生きる(活かす)社会について考える
- 5) 自分の生きる(活かす)社会について考える
- 6) マナーとルール

8月12日(3日目)

テーマ：将来について考える ～自分を表現する～

- 7) 小論文
- 8) キャリアについて
- 9) 3日間のまとめ